

オルファ カターナイフ

世界標準になった、独自の「折る刃」式

オフィス用品として欠かせないカッターナイフは日本のオリジナル。創業者が昭和 31 年、ガラスの破片と板チョコからヒントを得て、刃先をポキポキ折ることで最後まで切れ味を持続させる方式を考案、世界初「折る刃式カッターナイフ」が誕生した。



商品開発 の背景 舞台裏

創業者・岡田良男は、小さい頃から手先が器用で、工作が得意だった。家が貧しかったため、様々な職に就いた後、大阪市内の印刷工場に勤めた。その頃の印刷工場では、職人たちがナイフやカミソリを使って紙を断裁していた。何枚にも重ねた紙を切るのに、刃物はすぐに駄目になる。良男は考えた。「ナイフは研がなければならないし、カミソリは捨ててしまうから無駄になる。使い続けても切れ味が悪くならない刃物はできないものだろうか」と。

もともと工作好き、芽生えた“モノづくり”の衝動は抑えきれない。切れ味が悪くならない画期的なナイフを作るため、寝ても覚めてもそのことばかり考えるようになった。

発想のヒントは身近なところにあった。ひとつは、靴職人が使っていたガラスの破片。彼らはそれで靴底などの補修をして、切れなくなったらガラスを割ってまた新しい破片を使っていた。

もうひとつは、進駐軍が持ち込んだ板チョコ。格子状に溝が付いているので、ポキポキときれいに折れる。このふたつを組み合わせたら、決まった部分でポキッと折れる刃物ができるのでは。刃物を使う場合は、切っ先を使う事がほとんど。駄目になった切っ先を折れば、いつも新しい刃が使えるはずだ……

このようにして、世界中の誰も思い付かなかった、「折る刃」式という斬新なアイデアが生まれた。

人生のすべて
をカッターの
開発に捧げた

「折る刃」にするためには、刃に溝を入れなくてはならない。当然、刃自体の強度は落ちるから、何らかの形で刃を保護する必要がある。となると、歯がむき出しになる従来の折りたたみ式ナイフのような形は無理だ。スライド式にして、切っ先だけをホルダーから出すようにしよう。

難しいのは刃に入れる溝の角度と深さだった。切れ味と強度を保ちながら、同時に折れやすくしなければならぬ。何度も試行錯誤を繰り返し、1956(昭和 31)年、ついに満足の行く試作品が完成、世界初の「折る刃」式ナイフは完成した。しかしこれを製品化する資金がなかった。刃物メーカーにアイデアを売ろうとしたが、今までに見たこともない不思議な形のナイフに対し、業者は否定的だった。「こうなったら自分で作って売るしかない」。昭和 34 年、「折る刃」式の実用新案を出願し勤めていた印刷工場を辞めて岡田商會を設立した。ここまで来たら、もう後には引けない。全財産をかけ、町の小さなプレス工場に 3000 本の製造を依頼した。3000 本とはいってもすべて手作り。出来上がったナイフは寸法も品質もバラバラ。ペンチとヤスリでひとつひとつ手直してデザインや製版関係の会社に飛び込みで直接売って歩いた。便利で使いやすいという評判は口コミで伝わり、1年で全部のナイフをさばくことができた。

社名を
「オルファ」に

「折る刃」式ナイフの第1号の製品が発売されたのは昭和 35 年。製品名は「シャープナイフ」。当時の物価からするとかなり高かったが、新聞や雑誌に広告を出したこともあり、印刷関係の業者だけでなく、一般家庭にも広く浸透していった。1967(昭和 42)年、兄弟4人で岡田工業を設立。ブランド名は、「折る刃」から派生した「OLHA」にすることを考えたが、海外では H を発音しない国もあるということから、「OLFA」に決めた。その後昭和 59 年、社名を「オルファ」に変更し、現在、世界百ヶ国以上に輸出するまでになったほか、オルファの刃のサイズ、折れ線の角度が世界標準に。一本の発明品が世界中でトップシェアーを誇る商品に成長した。